

ラオス SATREPS プロジェクト (JICA/AMED) (注) の最終会議をラオスの首都ビエンチャンで開催 (2019.4.2)

狩野繁之 研究所 熱帯医学・マラリア研究部長とラッタナサイ・ペツソウヴァン ラオス保健省感染症対策局長の共同座長で、ラオス SATREPS プロジェクトの最終会議を開催しました。



開会式の様子：左からポール IPL 所長、ラッタナサイ局長、狩野繁之部長

NCGM の海外研究拠点の一つであるラオス国立パスツール研究所 (IPL) を研究拠点として、2014 年 5 月にスタートした本寄生虫研究プロジェクトは、ラオスで甚大な健康被害をもたらしているマラリア、メコン住血吸虫症、並びにタイ肝吸虫症の研究と対策を実施してきました。石上盛敏 研究所 熱帯医学・マラリア研究部上級研究員が、5 年間 IPL に常駐し、ラオス人若手研究者ら、並びに日本の研究メンバーと共に、上記 3 寄生虫疾患のフィールド調査、ラボワーク、ラオス保健省への政策提言、並びに保健人材の育成を実施してきました。



会議には研究メンバーである東京大学大学院の神馬征峰教授、琉球大学大学院の小林潤教授らが日本から参加しました。ラオス側はポール・ブレイ IPL 所長、ボアシー・ホンヴァントン保健省マラリアセンター元所長を始め、マラリアやメコン住血吸虫症が流行する

県の保健局職員、JICA ラオス事務所、在ラオス日本国大使館、WHO ラオス事務所の関係者ら、総勢 76 名が参加しました。



開会の挨拶では、ラッタナサイ感染症対策局長が、感染症対策における研究の重要性、並びにラオスの保健医療人材の育成に本プロジェクトが貢献してきたことに対して、JICA、AMED、日本政府、日本の研究者に対して感謝の意が述べられました。5年間の研究成果は、IPLのラオス人若手研究者ら、並びに琉球大学大学院博士課程に留学したラオス保健省マラリアセンターのプッタノン氏が報告しました。無症候性マラリア感染者の問題、薬剤耐性マラリアの急速な拡散、ラオス初のサルマラリア原虫のヒト感染症例の発見、ラオス軍兵士がマラリアのハイリスクグループであることなどを報告しました。発表ごとに活発な議論や質疑が行われました。本プロジェクトの研究成果は、すでに同国のマラリアやメコン住血吸虫症の制圧計画やガイドラインに組み込まれています。

また会議の合間に栄研化学が開発した簡易遺伝子診断技術 LAMP 法の検査機（5台）のラオス保健省への贈呈式も行われました。本検査機はすでに5台がラオスに導入されています。今回贈呈された検査機と合わせ、マラリア流行地域で患者の診断に活用されます。LAMP法は従来の顕微鏡検査や迅速診断検査キットでは検出できないマラリア感染を見つけることができます。2030年までにラオスからマラリアを排除（elimination）することをWHOとラオス政府は目指しています。LAMP法がマラリア排除達成を加速させる起爆剤になることを期待しています。本プロジェクトは、4月末に平成と共に終了しますが、ネオファーマジャパンや栄研化学の支援を受け、引き続き NCGM が IPL と共に、ラオスのマラリア研究と対策に貢献します。



注：地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム（SATREPS）。国際協力機構（JICA）と日本医療研究開発機構（AMED）が共同実施する日本と開発途上国の共同研究プログラム